漁村における“共”のカタチ

—空間利用からみたコモンズとその意義—

Sharing form in a Fishing Village: Commons by Space Use and Its Significance

宮 崎 篤 徳*

Atsunori MIYAZAKI

1 はじめに

漁村とは、若干の違いはあるとして「おもに漁業を生業としている村」と定義づけることができるであろう。この意味が示す通り、国土を海に囲まれた日本において多くの漁村は当然のように海に面して立地しており、海へのアプローチを奪い合うかのように住居が密度高く建ち並んでいる。海・浜を生業の場（ハマ）としている以上、海に近い土地での集住（ムラ）は当然のなりゆきであろう。日本の地形の特性上、海と山に挟まれた限られた土地にムラを形成する。現地調査の際に地形と格闘しながら集落を形成してきた過程を、今なお見ることができる。しかし現在の漁村の置かれている状況は深刻だ。昭和後期以降、多くの漁村では人口減少、少子高齢化が徐々に社会問題化し、現在、集落を維持することが難しい集落も多く存在する。近年、この課題を解決すべく、地域内外の枠に囚われない地域活性化、まちづくりの取り組みがさまざまな集落で進められている。その取り組みの多くは、六次産業化に代表される新たな経済活動の創出や継業支援、移住支援のための空き家活用、住民コミュニティ拠点の運営といった、生業やコミュニティを基盤にしたソフト面の支援策が目立つ一方で、集落の既存の地域資源の活用を基盤にした取り組みはあまり見られない。

本稿では、漁村の屋外空間における所有と利用の関係から、漁村のもつ空間利用形態の特性について事例をもとにあぶり出す。そこから漁村のもつ空間利用の特徴と傾向を定義し、漁村のこれからの見据えた漁村特有の“コモンズ”を基盤にした地域づくりの在り方を示したいと思う。

2 漁村における「公・共・私」のカタチ

日本の多くの漁村は密集した民家と、隙間を縫うよう

に張り巡らされた道（路地）や水路で構成されている。限りある土地での集住であることで、屋内空間の確保に限界があるという状況から、漁村のコモンズの特徴は路地や水場、私有地内の庭や隙間などの屋外空間に多く表れる。以下で、いくつかの事例を元に漁村における屋外空間の所有状況について明らかにし、所有と利用の状況からコモンズの特性をあぶり出していく。

(1) 「公・私」空間の分類

漁村に限らず、我が国においては土地がある以上、その土地には所有者が存在する。ある土地を誰が所有し、誰が利用しているのか。その所有関係を根拠づける資料として地籍図がある（図1）。地籍図を用いて「公」的空間としての道（道路）・水（水路）と、「私」的空間としての地番で示された敷地（共有地・私有地）を読み取ることができる。道や水路は現在では基本的に自治体（国や県、市町村）が管理しているが、日常の清掃などは地元住民が定期的に清掃奉仕をおこなっていることが多い。また、大規模な工事（石垣の崩落、手摺の設置など）が必要な際は、地元の要請があればその都度補修をおこなっている。地番で示された敷地については、その多くは個人所有の土地であり、住宅敷地や個人の田畑として利用されている。

図1 地籍図（原図）

(2) 「漁村における「共」的空間の存在

前項で地籍図を用いて「公・私」空間を定義したが、漁村では「公・私」の枠組みでは分類できない空間が数多く存在する。

一例を示す。図2は油宇集落（山口県大島郡周防大島

* 関西大学先端科学技術推進機構地域再生センター 非常勤研究員 Research Fellow., Regional., Reclamation Center.,

ORDIST., Kansai University., Dr. Science of Arts

キーワード：1) 公私空間, 2) 共空間, 3) コモンズ, 4) 敷地利用, 5) 住民主体

町)の井戸である。井戸を囲うように瓦葺きの東屋が設けられている(図2左)。地籍図(図2右)をみると井戸のある敷地が地割されていることがわかる(902で示された敷地)。この敷地は現在、町の所有となっているが、かつては集落の自治組織が所有・管理してきた。今でも住民主体で利用・管理されており、水質検査も定期的におこなわれている。所有自体は地元自治体であるが、日常の管理は地元住民がおこない、利用についても地元住民の日常生活での利用が主となることから、この902の敷地は油宇集落におけるまさに「共」的空間であるといえる(ヒアリングにより、かつては飲み水や家庭内の洗い物の際の利用がメインであったが、現在では主に生業の道具の洗い場として利用しているとのこと)。

図2 油宇集落の井戸(右:地籍図を元に作成/左:902敷地の写真)

油宇集落の事例では、井戸は地割された敷地に「共」的空間として存在する。他にも漁村では水路上や道上、個人敷地内に井戸や洗い場などが置かれているのをよく見かける。これらの井戸、洗い場などは、現在のように集落到上水道設備が整えられ、各住戸に水が供給される以前は、住民の水確保の為、生業道具や日常着の洗濯場として活用され、重要な生活インフラとして機能していた。また、そこは単なる水確保、洗い場としての利用だけでなく、住民の集いの場、語らいの場、情報共有の場として機能してきた。さらには重要な水資源の恵みを敬うため、水害・山津波(土砂災害)に対する畏怖・鎮魂のための祈りの場としても存在してきた。実際に漁村に行くと、井戸や洗い場の周辺に腰掛けが設置されていたり、祠が祀られている空間を散見する。

図2で油宇集落の井戸を事例に漁村における「共」的空間の存在を示したが、井戸を利用の側面で見ると上水道が敷設された現在においてあまり重要でないかもしれない。しかし文化的・景観的な側面から見ると受け継がれてきた利用のカタチとして、また住民による維持・管理の仕組みを基盤にしたコミュニティの場として今なお重要な意味をもつ場所であるといえる。

(3) 絡み・混ざり合う「公・共・私」

漁村における「共」的空間の存在は漁村の特徴を示す

一つの指標である。それと同時に、漁村では「公・共・私」空間とそこでの利用のカタチが錯綜する状況を多く見ることができる。

図3は神崎集落(愛媛県西宇和郡伊方町)の腰掛けの事例である。腰掛け(ベンチ)が道の上に設置されている。地籍図509-1敷地の所有者は商店を営んでおり、商店を利用する住民の憩いの場でもあり、入店の際に荷物を置く物置スペースとしても利用されている。また、腰掛けが設置されている道の上部には日除けのシートも張られており、腰掛け空間をより良い環境にしようとする工夫がなされている(シートについては、商店の店内に日が差し込まないようにする意味もある)。道の上に腰掛けを設置し、住民共有の休息の場、憩いの場として利用している空間である【公的空間の共的利用】。

図3 道にはみ出す腰掛け【公的空間の共的利用】(神崎集落)

図4は神島集落(三重県鳥羽市)の洗い場の事例である。道の上に洗い場がはみ出して設置されている。地籍図の208で示された敷地の所有者が利用している。ヒアリングによると、かつては洗い場の横の208敷地の一角に水溜が設置されていて、そこに水を溜めて洗い場を利用していたようである(地籍図137-0-2敷地に共同の井戸が設置されており、そこから水溜に水を引いていた)。現在、水溜は無く(かわりに物置が設置)洗い場に上水道からの蛇口が取り付けられ、今でも現役で利用されている。道上に洗い場が置かれ、個人利用されている空間である【公的空間の私的利用】。

図4 道にはみ出す洗い場【公的空間の私的利用】(神島集落)

図5は串集落（愛媛県西宇和郡伊方町）の事例である。地籍図を見ると、地図上の左下の道と右上の道は繋がっていない。しかし、現況は415敷地の中の一部を通り抜ける形で道として利用している。ヒアリングによると、右上の道は昭和30年代に敷設された自動車道で、集落内から自動車道にショートカットしてアクセスすることを目的に利用が開始されたと聞いた。道として利用されている箇所の一部は屋根がかけられ、物干しが設置されているなど、非常にプライベートな空間の印象であるが、実際に415敷地の所有者以外の住民も日常的に利用している。個人敷地内の一部を提供し、道として利用している空間である【私的空間の公的利用】。

図5 敷地内のみち利用【私的空間の公的利用】（串集落）

道を道として利用することは当たり前のことであるが、その空間を共同で、もしくは個人で利用する、このような空間と利用の関係は漁村のもつ特徴の一つである。この「公・共・私」の空間と利用が絡み・混ざり合った現れ方をここでは“共”（とも）として定義づけ、“共”（とも）が現れる空間を“共”のカタチ」と表現する。「公・共・私」の枠組みを超えた空間と利用の関係が、同じ（同一）の場所で同時（一緒）に現れる“共”のカタチ。漁村における土地面積の制約と濃密なコミュニティの蓄積により現れたであろう“共”のカタチが、漁村のこれからを考える上での強力なアイデンティティになるのでは、と考えている。

（4）変化する（失われる）“共”のカタチ

漁村での“共”のカタチを成立させているのが、許容し合えるコミュニティの存在であり、集落内の住民同士の決まり事（もしくは暗黙の了解）に基づく空間と利用の現れである。“共”のカタチを維持するには、ムラ単位での住民同士の濃密な関係が重要であり不可欠である。

図6は矢櫃集落（和歌山県有田市宮崎町）の事例。当初はAとBの住宅の間を抜けるかたちで道が敷設されていた（1988年の地図参照）。その後、1996年頃にはBの住宅が空き家になった。2000年に入りAの住宅の所

有者がBの住宅を手に入れ、それぞれの住宅を繋ぐ目的で改修をおこない、それに伴いAとBの間の道が塞がれてしまった。しかし動線を確保するために住宅の周囲の隙間部分を提供し道としての機能を確保している。

この矢櫃集落の事例が示すように、住民同士の関係性から立脚した“共”のカタチは、状況が変われば変化を繰り返す。微細な変化、時には大幅な変化を重ねさせて現在の“共”のカタチが現れている。住民主体の有機的な空間の在り方が示されていると捉えることもできる。

※住宅、敷地の経年変化については、ゼンリン住宅地図とヒアリングによる

図6 道のルート変更の事例（矢櫃集落）

しかし近年、移住者などの地域外関係者が増加しつつある漁村においては、絡み・混ざり合った「公・共・私」空間利用である“共”のカタチを共有できない場面が起こるであろうと想定される。実際、ある集落で地域外の土地所有者が、購入した敷地内で昔から共有されていた「みち」的利用を拒否し、自治会との協議の結果、二地域居住を断念し土地を手放すといった事例も聞いた。漁村の特徴的な空間利用である“共”のカタチを継続することは、漁村の空間的オリジナリティを維持することに

も繋がる。今後、漁村ごとの住まい方のルールづくりなど“共”のカタチを維持するための仕組みを構築することも視野に入れる必要があると考えている。

3 “共”の存在意義と未来に向けて

漁村のこれからを考える上で、漁村の持つ空間利用の特性を把握し、その特徴を活かすことが重要であると考えている。

脈々と受け継いできた漁村の空間、密度高い住居立地とその間を縫うように張り巡らされた路地空間は、生活する住民にとっては日常生活での車の乗り入れが出来ない、防災上の観点からは緊急車両が侵入できない空間であるかもしれない。しかし、文化的観点からは、瓦屋根が連なる家並、石垣や石畳、板壁の民家で構成された路地空間は漁村の地域性を特徴づける文化的景観となりうる。また、井戸や洗い場は、かつての水回り生活空間であり特徴的景観として存在する一方、その多くは現在、利用されていない生活遺産としての側面を持つ。これを負の側面として捉えるのではなく、有事の際の活用を見据えた再生計画を立ち上げ再整備することで、日常コミュニティの場として活用することも考えられる。

“共”のカタチは濃密な住民相互補助のカタチ、柔軟な空間利用のカタチの現れであり、漁村の特徴的な空間利用のカタチである。これまでの都市空間における公的空間と私的空間の関係は、道は道、敷地は敷地といった純化された利用のカタチが多くを占めてきた。しかし、都市においても近年は公共空間・パブリックスペースの新たな活用の仕組みづくりが広がりを見せつつある。漁村においても絡み・混ざり合う「公・共・私」空間利用の仕組み、“共”のカタチを継続し、これを活かした地域づくりを考えていくことが漁村の魅力向上に繋がると考える。

(1) 漁村のコモンズ（総有から“共”のカタチへ）

漁村におけるコモンズを考えたとき、日本には入会（いりあい）、あるいは入会地という山林原野の共同利用の方法が古くから存在してきた。漁村においてもいくつかの集落で居住域（ムラ）の後背部の一部を入会地として利用していた、と聞いたことがある。その入会についての近代法的な解釈として「総有」という所有形態がある。「総有」とは、土地など不動産の共有形態のうち、共有・合有・総有のごとく区分されるなかの一類型であり、三者のなかではもっとも「団体主義的な色彩が強い」とされている。入会という土地利用の方法に対して「総有」という解釈が位置づけられているように、ムラ内における絡み・混ざり合う「公・共・私」空間利用についても

解釈の位置づけが必要であると考え、本稿で“共”のカタチ、と名付けたところである。漁村の居住域に散らばる何気ない風景である“共”のカタチ。この空間利用が漁村のコモンズの基盤であり、漁村らしさを生み出していることを住民が、移住者が、来訪者が認知できること、これが空間に立脚した漁村の未来を考える上での最初の一步になるのでは、と考えている。

(2) 2030年の漁村

近年、いくつかの漁村では従来のコミュニティと地域外関係者との関わりにより、新たな就業形態やコミュニティが生まれつつある。2030年の漁村の在り方を考えた時、地域外との繋がりが広がる流れを一過性の流行で終わらせてはいけない。持続的な地域づくりにつなげるためにも、漁村が持つ住民コミュニティから立脚した空間的特徴、すなわち絡み・混ざり合った「公・共・私」空間利用である“共”のカタチを各々漁村のオリジナリティと捉え、空間・生業・コミュニティが一体となった地域づくりが重要であると考えている。

空間を軸にした漁村の今後を考えたとき、新たな“共”のカタチの構築が必要ではないか、と考える。漁村における“共”のカタチは、その多くが狭小な敷地を有効に利用しようとする意思が空間に表現されたものであるといえる。狭小な住宅内では補完できない用途を屋外空間に委ねる。より良い住空間を追い求め微更新を重ねながら空間を生み出していく。かつて命がけの狩漁をおこなっていた頃の生命力に満ちあふれた空間表現のようにみえる。しかし現在、日本の漁業は低迷し、漁村の多くは人口減少にともなう空き家・空き地化の増加が問題となっている。今後、10年、20年後はさらにその傾向は進んでいると想定される。しかし空き家や空き地の増加は深刻な問題であるが、見方を変えると密集した居住域内に新たな余白が生まれた、と捉えることができるのではないか。図6の矢櫃集落の事例のように隣接する空き家や空き地を入手し敷地を拡張することで住宅の狭小性を解消する。これもいいが、空き家・空き地を集落共有の空間として捉え、より良い住空間を目指して新たな“共”のカタチを考える。これまでの“共”のカタチが、拡大・拡張する漁村の中で生まれた空間であるのに対して、これからは縮退する漁村での“共”のカタチについて空き家・空き地をベースにして考える。過去から受け継いだ“共”のカタチと、新しく生まれた余白による“共”のカタチが重なって新たな漁村の未来が展開されることを期待している。もちろん私自身もその未来づくりに主体的に関わっていく所存である。

Keywords: 1) Public and Private Space, 2) Sharing Space, 3) Commons, 4) Site use, 5) Residents-based